鉄馬偉人伝

このんの神を開け!

第61回

ハバーマン・パフォーマンス
トーマス&ダニーさんの巻

HABERMAN PAFORMANCE

イラスト・文○綿谷寛
Illustration & Text : Hiroshi Watatani

鉄馬周辺の偉大な方から、
貴重なお話をうかがうこのコーナー。
今回は、現在のヨーロピアン・スタイルの
原型を生み出したともいえる
カスタム・ビルダーのご登場です。

以前、このページにご登場いただいた日本のヨーロピアン・カスタムの草分け的存在である「BAD LAND」のクワイケイイチさん。そのクワイさんに多大な影響を与えた本場ドイツのヨーロピアン・カスタムの巨人、「ハバーマン・パフォーマンス」のトーマス&ダニーのハバーマンご夫妻がこのほど日本に来日した、という連絡を受け、さっそくワレワレもお目にかかることにした。

「中原街道沿いの、中延辺りにある外車販売店ですから…」

担当S君のイージーな待ち合わせ場所の説明にもかかわらず、間違わずにピタッと指定の店にたどり着いたのは、その店先でオーラを放つ1台のバイクがあったからに他ならない。それが、ボクが初めて目にする本場のヨーロピアン・カスタム・バイクだった。

まだ未塗装の状態ではあるが、手でたたき出した完璧なフレームの造形美は、まるで現代彫刻の作品を見るようだ。

実はこのバイクは、大田区中延の自動車販売店「セレクト」のオーナー、染谷聡さんが直接ハバーマンさんご夫妻にオーダーをかけた1台で、今回、クールブレイカーへの出展も兼ねてクワイさん、染谷さんのお二人が日本に招いたという。

「私達のバイクは、いろいろな案を二人で出し合って、それを絵に描いてみたりして形にしていき、最終的に一つのバイクとしてハバーマン・パフォーマンスの作品として世に出しているワケで、ただ単にこのフェンダーだけを売るフェンダー屋さんでもないし、ストレッチ・タンク屋さんでもありません」

と語るトーマスさんとダニーさんは、時にはバイク作りを巡って口論になることもあるそうだが、インタビュー中は二人とも終始ニコニコ、オテテニギニギと、あてられっぱなしの仲睦まじいご夫妻だ。

日本でヨーロピアン・カスタム、イコール・ハイテクというイメージがありますが、実際、バイクを見る限り人の温もりを感じさせるバイクですね。

「日本で、ワレワレの作るバイクにどういうイメージをもたれているか知りませんが、確かに最新のテクニック、例えばエレクトリカル的なパーツや、電動で動くサスペンションとか、そういうものは積極的に取り入れてます。とはいえ、基本的にはハンド・メイド。私達は、芸術として自分達のものを作ってますから。それが温もりと感じるのでしょう」

確かにおっしゃる通り、その仕上げは芸術的ですらありますが、このバイクは誰にでも乗りこなせるような形状ではないですよね。ユーザーの意見というのは聞き入れてもらえるのかしら…。

「もちろん! 好みはお客様に合わせて。ただ、このバイクに乗っていれば、その次にくるお客さんは『オレはもっと上を行く!』という風に言われたりするんですが(笑)、その人の体形によっては乗りづらくなってしまうこともあるワケで、そういう時は、お客さんから『それでも作りたい』と言われても危ないから勧めませんよ。好みは好みとして、それで、もし強度に欠けたりとか、そういうネガティブな要素があればやりません。乗る方が大切なので。見た目にカッコよくても走らないんじゃ、ぜんぜんおもしろくありませんからね(笑)」

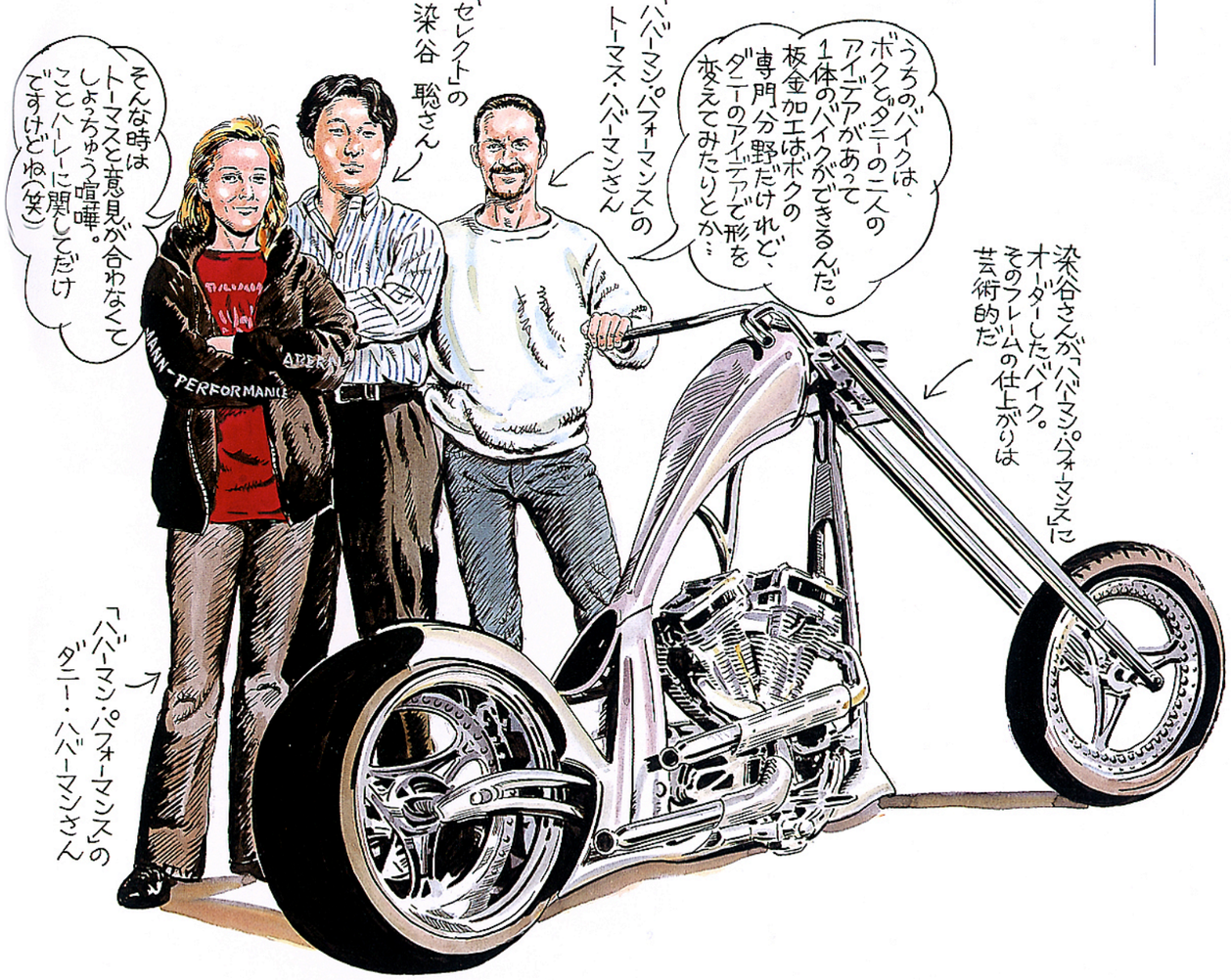
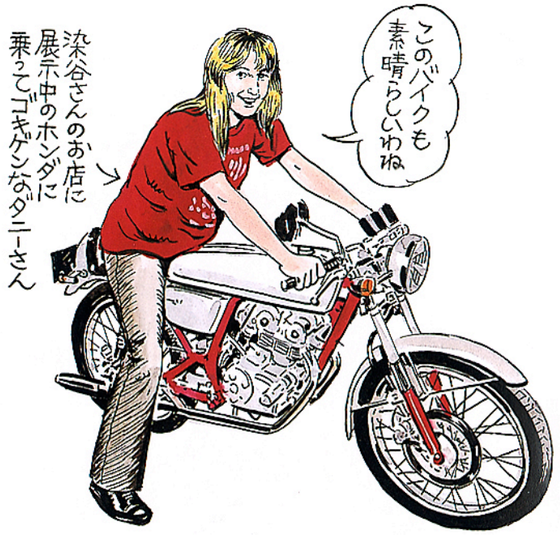
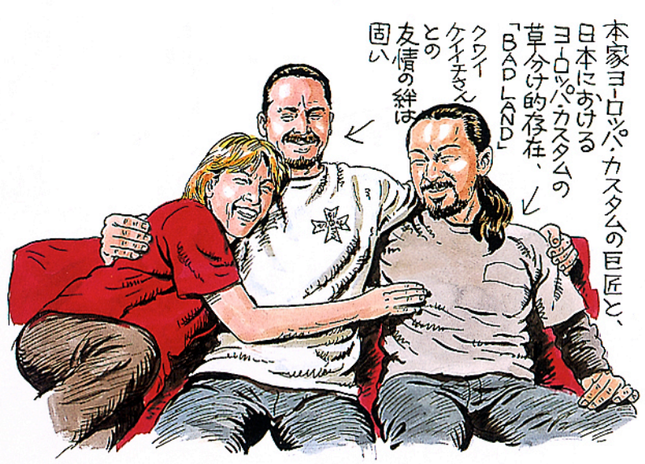
ごもっとも。強度不足はいけません、強度不足は! 今、日本人が最も神経質になっている部分ですから(苦笑)。

「カスタムは基本的にハンド・メイド。芸術として作ってますから」

しかし、バイクという工業製品をモチーフに、芸術性を追求するのは並大抵のことではないはずだ。

聞けば、トーマスさんの前職はメルセデス・ベンツの板金部門のチーフだったとか。いわば板金の世界最高峰だ。その確かな技術に、ダニーさんの豊な感性が加わり、ハバーマン・パフォーマンスのバイクは生まれるワケだ。

長年、ドイツのクラフツマン・シップを見続けてきたクワイさんが語る。

「彼らは、同じものは二度と作らないんですよね。だから価値がある。あとは全体的にそのアイデアというか、デザイン・センスですよね。やっぱりアメリカ車には出てこないですよ。もう何十年もヨーロッパの建物を見て育った人達の感性じゃないと。石畳の敷き詰められた世界で生まれ育ち、そういうようなバック・グラウンドをもった場所じゃないとたぶんあれはできないと思いますね。だからスペシャルなんですが」

本場ドイツの他の有名なカスタム・ショップでもフレームに関してはトーマスさんにオーダーするとかで、注文はひっきりなしだそうだ。それでも個人のお客さんを優先して、納期は約半年。ドイツの芸術肌は、実に几帳面な方であった。